



その壱

眠りから醒めた俺は溜まりに溜まった水分を放出しようと妻の実家のトイレに駆け込んだ。

これは誰にも有る事なのか俺だけなのかは解らないが酒を飲み過ぎると小便がしたくてしたくて堪らないのに中々出ないことが有る。

十分な時間をかけて用を足した俺は・・・

実は二年ほど前から立ち小便が苦痛に感じてきた俺は洋式便所さえあれば、座り小便をする事にしている。実際俺だけじゃなくて座り小便する男共が増えているらしい・・・

>帝国データバンク？より抜粋<

>大手衛生陶器メーカー「TOTO」（東京都港区）が今年6月、全国の20代以上の男性2,312人に「自宅トイレで、小用はどのようなスタイル？」と聞いた調査によると、圧倒的に多いのは「洋式便器に向かって立って」という「立ち派」で65.4%でした。一方、「洋式に座ってする」という「座り派」は23.7%で、実に4人に1人になっていました。座る理由は、半数近くが「掃除がラク」、次いで4割が「姿勢がラク」というものです。<

小便だけでなく大きい方の欲求も少々感じた俺は・・・控えめに少し・・・息んでみた・・・しかし、出そうに無い。

少し違和感があったが、一応第一の目的を達成させた俺は居間に戻り『そろそろ帰ろうか』ということ事になり、皆に別れを告げ家族と共に帰路についた。

そう・・・ここまでは・・・何の変哲も無い正月の二日目であった。

そう・・・ここまでは・・・

地獄まで・・・後一時間 🍷

絶対に出来ない状態で堪らなく便意をもよおした事が貴方にはあるでしょうか。

渋滞時の運転中、長距離バスの車中、重要な会議中、受験の真っ最中、やっとこさで叶った彼女とのデート中、喪主を努める葬儀中・・・未だ未だ限りなくありますが・・・

そんな時に神様が与えてくれた唯一のチャンス、日頃はマナーが服を着て歩いているような貴方も、人を押しつけて勝ち取った真っ白な便器・・・一気にズボンとパンツを一緒に下ろした貴方は至福の絶頂を迎えます。『はっひiiiiiiiiiiii』

しかし、私の所には悪魔がやってきたのです。

車を車庫に入れるやいなやエンジンも切らずに自宅のトイレに飛び込みました。

『はっひiiiiiiiiiiii・・・ん?・・・ん?・・・ん?』

肛門が笑顔で口を開けて太っといのが出口まで来ているのに・・・

出ない・・・でない・・・で・・・な・・・い・・・そんな・・・バ・カ・ナ・・・

いくら息んでも、肛門にコルク栓を詰めたように、○ンコが出ません。

『きゅう、きゅう』という便意は次第に高まりつつあるのに・・・で・・・な・・・い

腹を揉んでも、「の」の字を書いても、堪らず、アイデアの枯れた三流小説家のように、頭を掻きむしっても・・・で・・・な・・・い

えっ、私の思いが伝わらない?

ではイメージしてみてください。急性尿道炎には悪い遊びをした事のある方も無い方も、少なからず経験がお在りと思いますが、あのいや~~~な残尿感・・・ざ・ん・に・よ・う・か・ん

残便感という医学用語?が有るのか無いのかは知ったこっちゃありませんが、その気持ちの悪さと言ったら、残尿感の数百倍です。

あっ、悪い遊びといえは、○ジラミにやられた方もいらっしゃるかもしれません。

○ジラミ・・・と聞いて思い出すのは、某居酒屋で仲間と呑んでいる時に、偶々隣で呑んでいた知り合いの奥様の武勇伝。

なんでも今の旦那と付き合っていた頃、そりゃあ彼女も若かったでしょうし、初心だったでしょう。そんな天使に、悪い遊びをしてきたその旦那が何と○ジラミを伝染してしまったそう。

不安がる、否、痒がる彼女に、悪魔の旦那は・・・保身の為に・・・

『そっ、そりゃあ、Hしたら誰でもそうなるんや・・・自然な事や・・・』と開き直ったそう・・・

今ではグイグイ言わせてはる奥様も当時は何も知らなくて、悪魔の言葉を鵜呑みにしてしまったそうです。

ここまでくると、全く・・・鬼畜・・・です。

しもた、道草してたら・・・こんな時間になってしまった。

○ンコは未だに出口で止まったまま・・・地獄は未だ未だ続くのであった・・・

その参

人にはどれだけ頑張っても叶わぬ夢があるように、どれだけ息んでも○ンコが出ない時がある。

一時間ほど悪戦苦闘した俺は遂に諦めてトイレを出て、懺悔するように家族に有りったけの思いをぶちまけた。餓鬼共は興味無さそうにニヤニヤしながら正月番組を見ている。

「ム・プ・プ」・・・「下剤でも飲んだら？」と妻。

そうか！その手があったか！「で、下剤は何処や？」と俺。

「無いよ。私、便秘したことないから」

「げっ、俺はいったいどないしたらエエんや！」

「ム・プ・プ、この大袈裟太郎があ・・・ああ、○○ちゃんが帰って来とるから、貰ってきたらあ」と妻。

○○は俺の姪で正月休みで帰って来ていた。

20代の娘に『○ンコ詰まった、下剤、くれ！』というのも少し気が引けたが、

命に拘る事なので、勇気を出してお願いした。

彼女が中学生の頃だったならパツキンの髪を逆立てて

『てめえ、うぜえ、一回死ねよ』とケリの一発もいれてきたかもしれないが、姪っ子も大人になった。

「花火おじちゃん、大丈夫う。」と心配そうに下剤をくれた。

『ううう・・・お前も立派に成長して、エエ女になったなあ』と涙が出てきた。

し・か・し・・・である・・・下剤を飲むと言う事は、凶にしないとよく解らないかもしれないが、出口に蓋をした状態で直腸に更に圧力をかけたら・・・考えただけでも恐ろしくなってきた。

人は切羽詰まると頭が急速回転を始める。

『そうや、前に知り合いのナースに、○ンコが詰まった患者の肛門にスプーンのような物を使って穿くり出したと言うのを聞いたことがある。』

早速、妻にお願いしたら、即『却下』された。

四面楚歌の俺はトイレに戻り、ナースの言葉を信じ、綿棒を肛門に突っ込んで見た。

・・・だ・め・だ・・・

全てに見放された俺は・・・

『このまま、トイレの中で死ぬのかなあ』と絶望のどん底に居た。

・・・す・る・と・・・頭の中でメロディが流れてきた・・・五文字の単語と共に・・・

ながああああい、夜は始まったばかりである。

その四

誰にでもある幼少の頃の淡い思い出・・・

和服に身を包んだ優しい母が、にこりと微笑み・・・丸くて・・・柔らかくて・・・先っちょがピンクで・・・つんっ・・・となった・・・無花果のような・・・カ・ン・チ・ヨ・ウ・・・を取り出して

『○ンコ、詰まったらこれをブスリや!』

「待った、待ってくれえ・・・自分ですからぁ・・・」

と逃げ回った事がクラクラする脳内を走馬灯の様に駆け巡った。

『今の俺には、こっ、これしか無い・・・確かあの時は・・・成功した筈や・・・』

『けど・・・待てよ・・・浣腸って21世紀の今でも・・・存在するんやろか?』

『昔は確かに一家に一個は必ず常備してた筈やが・・・コンビニには売ってないに違いない』

『それどころか、ドラッグストアにも無いかもしれん』

『ひょっとしたら・・・SMクラブにでも行かんと無いかも知れん・・・』

家族全員が寝静まった民家のトイレにたった一人、ネガティブしている俺が居た。

そんな時、「風と共に去りぬ」のスカレットの言葉が浮かんだ・・・

「あっ、明日考えよ!」

そのまま・・・トイレの中で深い眠りについた・・・

・・・○ンコ、発射まで・・・後・・・8時間

その伍

時を遡ること2時間前（・・・別に遡らなくても・・・まあそう仰らずに）

実は妻に重要な哀願をしていた。

「たっ、頼む・・・救急車・・・呼んでくれ・・・ホント・・・マジ・・・」

彼女はシャロンストーン（あくまでも比喻ですから、突っ込み無で）のような冷酷な目で私を見下ろし・・・

「アホかっ！こんな小さな村で、そんな事でピーポー呼んだら、この事が世間に知れ渡って、子供たちは『糞詰まりの子供やああああ』って毎日罵られて、ああ考えただけでも恐ろしい？・・・そんなんやったら、銀行強盗でもしてくれた方がマシ！・・・先に寝るから」

彼女の言葉に・・・愕然とした・・・

世間・・・せ・け・ん・・・SEKEN・・・S・E・K・E・N

この魔物を敵に回したが最後・・・およそこの国では生きていけない。

ニートであろうがフリーターであろうが庶民であろうが中小企業の社長であろうがエリートサラリーマンであろうが政治家であろうが、いいや総理大臣であっても・・・何ぼアナーキストを気取っていてもこの魔物には叶わない。

そう言えば・・・先程乗っていたバスの中でも外国人のカップルが

マリー：「パフッ・・・ネエ、ポール、ニホンジンガアンナニコワガル『SEKEN』 ッテナニ？」

ポール：「パフッ・・・バツバカッ、マリー、コノヨウナバシヨデ、ソノコトバヲツカッチャダメダヨ。『SEKEN』 ッテナハ、TOYOTA ノ『KAIZEN』 ナンカアシモトニモオヨバナイクライ、カレラニトッチャタイセツナモノナダ、ドコデ『SEKEN』 ガミテルカモワカラナイ、ソノコトバハワスレナサイ。CIAヤテロリストナンカヨリ・・・モト・・・コ・ワ・イ」

そう、日本に居る彼らもSEKENの恐ろしさを良く知っている。私の命なんぞ、SEKENに比べたらどうでも良い事なのだ。

今は唯、唯、明日、ドラッグストアが開くのを待つだけだ・・・

夜明けの来ない夜は無い・・・のか？

・・・オンコ、発射まで・・・後・・・10時間

その六

白々と夜が明けてきた・・・便器に突っ伏したままの男は身じろぎもせず、死んだように眠っていた。

その頃、ドラッグストアの店員たちは忙しく商品を陳列していた。

カン子はこの店で働き出してから2年目の冬を迎えていた。

あの退屈な高校生活とおさらばして良かったと彼女はつくづく思う。仕事は目が回るほど急がしかったが、彼女には彼女だけの密かな楽しみがあった。

それは、『ヘンな客』が必ず一人は現れてくれることだった。

・・・今日はどんな『ヘンな客』が来てくれるだろう・・・そう思いをめぐらせるだけで・・・彼女はワクワク、ウキウキしてしまうのだ・・・

いつもなら、そのお楽しみは店を閉める間際に現われることが多いのだが、今日は違った。

何と店のシャッターを開けた途端に飛び込んで来たのだ。

その中年男が店に入って来た途端、彼女にはピーンときた。

『ウフフ・・・何かやってくれそう・・・』

男は辺りをキョロキョロしながら何故か無償に慌てていた。

普段なら『何をお探しですか？』と声をかけるのだが、敢えて放置しておいた。

何かを探しているらしいがなかなか見つからないらしい・・・

『あっ、ちらっとこっちを見た。』

しかし、男は直ぐに目を反らし・・・またアチコチ探し始めた。落ち着きが無い。

すると・・・突然、男の目が止まった・・・

その視線の先の陳列棚には沢山の『浣腸』が積み上げられていた。

『おっさん、朝から、カンチョーかよお』・・・早朝からの珍客に・・・

カン子はこの仕事を選んで本当に良かったとほくそ笑んだ。

『でも・・・おっさん、アンタの知ってる「無花果浣腸」はもう販売されていないんだよお・・・』

案の定、おっさんは見慣れないケースに困惑しているようだった。

20個入りの浣腸を手にとったまま呆然としている。

『おっさん、もっと下、下だよ・・・5個入りは・・・でもお、容量が2種類あるんだよねえ・・・40CCと20CCがさあ・・・さあ、おっさん、どっちを選ぶかああああ』

40CCの5個入りをガシッと掴んだおっさんは、カン子の方をチラリと見た。

『そうだよねえ、おっさん・・・カンチョーだけ持ってこの若き娘の所には来れないよねえ』

『さあ、おっさん、何をカモフラージュで買うんだあ・・・ビデオだったら重ねれるけど、良く似た大きさの商品はなかなか、ないぞお・・・』

暫く、おっさん、マゴマゴしてたのに、急に一大決心をしたような顔で、カンチョーを驚掴みにしてこっちへやってきた。

『うわあ・・・開き直ったな、こりゃあ・・・』

ドンッ、とカウンターにカンチョーを置いたおっさんは、でも、視線が明後日の方を見てた。

ここが魚屋だったらなあ・・・とカン子は残念だった。

『へええい、カンチョー、一丁お、お買い上げええ』

って大声で言えるのにい・・・

おっさんは、カンチョーのケースを大事に驚掴みにしたままなので、カン子が渡した、釣銭がなかなか財布に入らないようで焦っていたが、諦めたようにそのまま、店を飛び出して行った。

『あああ、朝からあんなオモロイもんが見れるなんて・・・

♪ドラッグストアで働くってえ・・・サイコォ♪サイコォ♪』

と思わず、ミュージカルしてしまうカン子であった・・・

・・・○ンコ、発射まで・・・後・・・45分

その七

いくら正月と雖もこの混雑は異様だった・・・

満員電車はゆっくりと動き出した。

全く身動きが取れない・・・回りにいる連中の体温や体臭がそのまま直に伝わってくる。

右上腕部に直接降れている女の乳房からはその奥にある心臓の音がヴードゥー教のリズムで響いていた。

『ドクン・・・ドクン・・・ドクン・・・』

皆一様に苦痛に歪んだ顔をしている。

携帯が大好きな連中もこの混み様では手さえ動かすことができない。

『息苦しい・・・一体、この状態が何時まで続くのだろうか・・・』

彼らが暴動を起こさないのはきっと目的地があると信じているからだろう。

そう、其処に行けば必ずパラダイスがある。そう念じながら無数の有機体は危険な沈黙を保っていた。

それは、突然始まった・・・

『ばあ—————ん』

全ての電車のドアが一斉に開いた。

ドア付近の数人が風船が破れるように電車の外へ放り出された・・・外がどうなっているのかは、深い霧で全く見えない。

『乗客のみなさあ—————ん、何かに掴まってくださあ—————い』

『ここはまだ目的地ではありませんえ—————ん』

絞り出すような車掌の声が車内に木霊する。

体半分を車内に残した老人、放り出された奴に腕をもぎ取られた中年男、殆どの衣服が引き裂かれて下着が露になっている若い女・・・

誰も何が起こったか判らずに思考停止状態で・・・けれども、放り出されないように必死で何かを掴んでいる。

『まだです・・・まだ外に出ては危険です。折角の苦労が水の泡です。』

『ここが・・・ここが・・・辛抱のしどころです。』

『耐えてください・・・耐えれば・・・耐えるほど・・・目的地にさえ着けば・・・ドーパミンが・・・』

必死の車掌の声も・・・乗客の阿鼻叫喚にかき消されてしまった。

